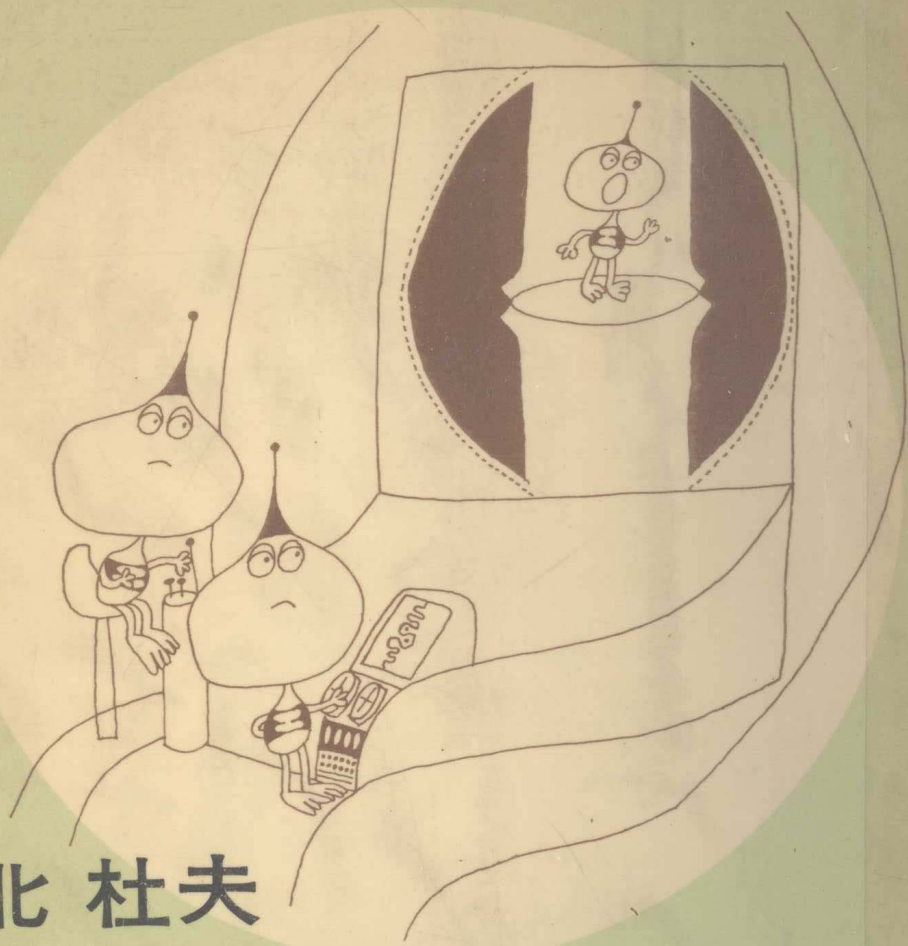




北 杜夫
へそのない本

へそのない本

北 杜夫 新潮社





へそのない本

一九六三年十一月二十五日 印刷
一九六三年十一月三十日 発行

定価 三〇〇円

著者 北 杜 夫

発行者 佐藤 亮 一

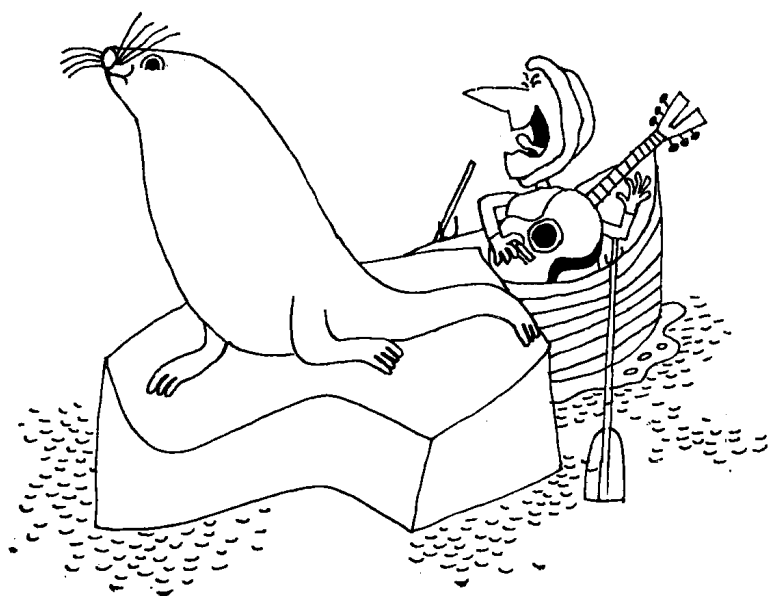
発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(勤)一一一(番)
振替 東京八〇八番

印刷 二光印刷株式会社
製本 新宿加藤製本所

(落丁のものは本社又はお買求めの
書店でおとりかえます)

へそのない本・もくじ



1

小さな空色の花

六

さまざまな青葉わか葉

二

月見草のことなど

六

霧とサルオガセ

三

高山に咲く花々

三

2

どくとるマンボウ氷海をゆく

三〇

トビウオ休みのある島

三

果物の島の思い出

一〇

ページ

3

ひもじい頃の思い出 二三

嫉妬 二六

女性ばんざい 三〇

食べるが勝 三四

食卓の風景 三六

天下の美味 三三

女の執念 二六

怖ろしい女 二〇

悪口について 二四

赤ん坊と女 二四

4

宵 一四

童 女 一五

うつろの中 一六

百 蛾 譜 一七

港にぎらつく日が 一八

推 奨 株 一九

月世界征服 二〇

処 女 二一

贅 沢 二二

意地悪爺さん 二三

1

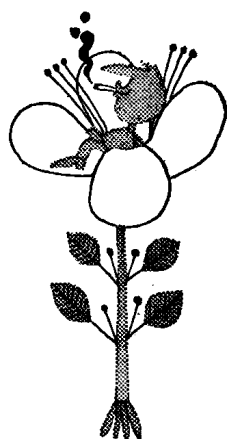


小さな空色の花

花と私という組合わせはもとより柄にあわないのである。第一に私はそれほど優しくない。第二に私は博物学には興味をもつが、観賞用の植物についてはおそろしく無知である。花屋の店頭に立つと、季節に応じてさまざまな花が飾られている。それなりに美しいと思うが、それは自然を無理に歪めたような彩りで、心底から好きにはなれない。その私が花の話を始めるのだから、どういう不粋な花談義になるか、保証の限りでない。

欧州の街で、街頭の花売りの姿には心を惹かれた。多くはお婆さんで、このうえなく肥満していて、善良そうなものもいれば意地わるそうなものもある。チューリップなどの原色の花々がセロファン紙につつまれて並べられている。それが北ヨーロッパの冬の陰鬱な街にこよない彩りを与えている。実際、あちらの人たちは何かにつけ花を贈られ贈るようだ。家へ招ばれると、ちよつとした花を持参するのが習慣になっている。花にもいろいろな意味合いがある。うっかり赤い花を持っていたりすると愛情の表現ということになる。

花うらないなども大衆の中にしみこんでいる。若い、まだ痩せた少女が、花びらをむしつて占



いをやっているさまは、想像しただけでもわるくない。

「あの人は私を愛するだろうか？」

一枚の花弁をむしる。

「ほんの少し？」

もう一枚むしる。

「それとも情熱的に？」

三枚目の花びらがむしられる。

「それとも全然愛してない？」

こうして初めに戻って、最後の花びらが運命を決する。うまい具合にいいところに当れば少女はうつすらと微笑するだろう。

「全然！」なんてところに当れば彼女はくちびるを噛むだろう。

このドイツ語で「全然！」^{ゲラニスト}という発音にはかなり激しい響きと感情がこめられているもので、聞いただけで胸がいたむ。そんな花びらをひきあてた少女のそばに、私はいたくないと思う。

といって、花を贈る習慣はなかなかいいものだと思うが、そういう花屋に売っている花に対して、私はほとんど興味を抱かない。

先だって、外国から帰ってきた人の家へ招かれた折、私は柄になく花を持ってゆく気になった。お菓子やお酒より先方も花に慣れているだろうと思ったのである。しかし、花屋へはいつてみると、いろんな花があるけれど、その名前さえ私にはわからない。なるだけ見た目によくてなるた

け安いのを、と私は考えたのだが、それがどれであるかがわからない。

うろうろしていると、店員が寄ってきて、

「カーネーションはいかがです。今日は母の日ですから」

なるほどなるほど、と私は思った。しかし先方の夫人に赤いのを贈って愛情の表現であると思われるのは困るから、

「白いのを。白」

と、私は言った。

白いカーネーションを持って私はそのお宅を訪れたのだが、白いのは亡くなった母親の場合ですと教えられて、私は恥をかいだ。そんなことさえ私は知らなかったのである。

それゆえ、私はここでは野の草花、わざわざ庭園などに栽培されたりすることもないひっそりとした野草について記したいと思う。

春咲く花は沢山あるが、もつともつつましく、そのゆえにもつとも象徴的ともいえるのがイヌノフグリである。

この名前はあまりよくない。狗いぬのふぐりとは、その果実が似ているからだそうだ。しかし、その名に反してこの花はかぎりなく可憐である。

イヌノフグリ、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリなどの種類があるが、一番普通に見られるのはオオイヌノフグリである。

私がこの草をはじめて知ったのは、太平洋戦争も末期に近づいて、空襲にあげられした時期であった。私は中学生で、昆虫に興味をもち、将来は昆虫学者になるつもりでいた。

しかし昆虫採集どころの騒ぎではなかった。毎日、私はゲートルを巻き、弁当をカバンに入れて家を出たが、それは学校へゆくためではなく、動員されていた工場へ行くためであった。そこで私たちは鉄棒を運び、トラックで砂を運び、あるいは旋盤にむかって爆弾投下器の部品をつくった。すべてのものが金属と油の匂いがした。

そういう日常であるだけに、自然界へのあこがれ、戦争とは関係なく営まれている虫たちの生活に対する興味はかえって助長されたともいえる。しかし冬であった。自然も何もかも冬で、寒く固く、すべてのものがかたく凍りついていた。

それでも季節だけはやはりめぐってきた。日ざしがいつとなくぬくもって、ときどき小さな蛇が空中に浮かんできており、そればかりかモンシロチョウが工場の中までとんでくる日もあった。そのような一日、私は工場の横手の道のへりに、緑色の雑草が芽ばえてきた中に、ごく小さな空色の花弁を見出したのだ。ほんの小さな藍色の花、なにか特殊な事情でもなければ見のがしてしまいうような微細な花である。それがオオイヌノフグリであった。

終戦後、信州の松本高等学校へはいってからも、この花と私はずっとなじみであった。信州の冬は寒い。おまけに食糧難のため、その寒気は骨にまでしみとおった。私たちは南松本の駅のそばの、工場の寮を借りて暮していた。そこから学



小さな空色の花

校までは歩いて半里ではきかないが、汽車の便がわるいので、私たちは大半畠の中の道を歩いて通った。冬にはどこもかしこも凍りついている。雪は少ないが、いったん降るとなかなか消えない。遙かにつらなるアルプスから吹きおろしてくる烈風が肌を刺す。

しかし、ようやくに空が春めいてくると、小川の土手にもついていた雪がばさりと水中に落ちこむ音が聞えるようになる。きびしく連なっているアルプス連峰はうつすらと霞んで見える。まだ春とはいえないが、春はもうすぐそこまでやってきているのだ。

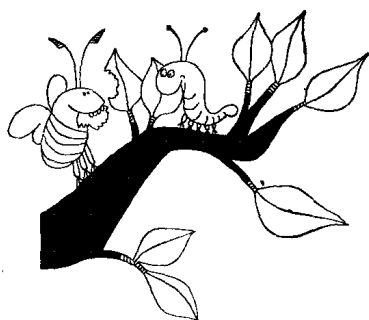
特に日ざしが暖かく、マントもぬいでしまいたいような一日、私は小川のへりでオオイヌノフグリを見つけた。東京で見たのと同様あまりにつつましく、それだけ可憐に、すでに藍色の花弁をつけていた。気をつけて探すと、畠のへり、道のわきなどにいくらかも見つかった。小さな蛇が訪れているのを見たこともあった。きびしい冬をへてきた目には、それがどんなはかの春の使者よりも、いきいきと懐かしく映じたものである。

オオイヌノフグリは、東京地方では二月末からもう花をつけている。欧州の原産で、明治の初めころ渡来したものというが、今では日本の至るところでその姿に接することができる。

彼女は低く地面に這っている。卵円形の小さな葉がびっしりついているが、関心のない者にはくだらぬ野草がはびこっているとしか思えない。しかし春早く、ごく可憐な藍色の小花をその草むらの中に見出すとき、誰だってその名前を知りたいと思うだろう。

オオイヌノフグリ……それにしても、この名は彼女にはどうしてもふさわしくない。

さまざまなか葉
青葉わか葉



初夏の候になつてもつとも目を惹くのは花よりもむしろ木々の若葉である。普通人々が庭に植えて尊ぶ樹よりも、雑木林の新緑がいい。寒い陰気な冬をおくる地方ほど、心理的にもその色は鮮やかだ。

落葉松の新芽を御存知だろうか。ごく小さな丸い玉芽がつきはじめる。信州では、冬、ほしやほしやとすくんでいた裸の落葉松の梢が、いつとはなしに緑っぽくなってくる。この玉芽がひらいて柔かな針葉となるころには、郭公の声が谷から谷へこだまするようになる。

漢字で落葉松とかくのは、故牧野富太郎博士によれば誤用だそうだ。しかし氏の労作『日本植物図鑑』をひもとくと、われわれになじみの多くの植物名が「誤用」とか「……と書くは非なり」となっていることすこぶるおびたしい。やはりこのくらいの大学者となると、相当意固地な精

神の所有者であつたようだ。試みに近くの松の類いをよんでみられよ。

「クロマツ。漢名、黒松（誤用）。ゴエフマツ。漢名、五鬚松、五釵松（共ニ誤用）。アカマツ。漢名、赤松（誤用）。日本ノまつハ支那ニ産セズユエニ厳格ニ云ヘバスナハチ日本ノまつニ松ノ字ヲ適用スルハ非ナリ。」

こうなつてはとても大変で、うっかり随筆ひとつ書けるものではない。

しかし、写真でしか見たことはなかったけれど、この人の顔だから私は好きであつた。晩年は乾いて皺だらけでひびわれて隠花植物の精みたいところがあつた。今でこそ彼は、日本植物学の恩人ともいわれる。しかし彼は正規の学問をうけなかったため、長い間学界からは白眼視されていたところがあつた。

この世にはいろんな関があるけれど、学閥というものほど愚かしく腹立たしいものもざらにはない。

『日本植物図鑑』の序を私はときどき読みかえす。

「……右明治廿一年以来、星移リ物換ツテ年ヲ闊ルコト実ニ数十歳、明治ノ御代ハ大正ト成リ、次デ昭和ト改元シ、……」

「本書ニ於テハ著者独自ノ見解ニ基ケル学名、並ニ新タニ発表セラレタ多クノ学名ヲ採択シ、又従来之レ無カリシ和名ノ解ヲ附シ、又更ニ漢名ノ当否ヲ画期的ニ匡正シテ記セシ事ナド、其他尚新シイ試ミガ多分ニ盛ラレテキルノハ此ニ改メテ其レヲ吹聴シナクテモ、是等ノ諸項ハ本書ヲ編ク諸賢ノ直チニ眼底ニ映ズル印象デアラウ」

この独自の悪文はたしかに心地よい。

一般に雑木とよばれる檜、欅などの若葉もそれぞれにいい。夏にまでなってしまうと、どこか埃っぽく疲れた表情の葉になるが、萌えてきたころの若葉はつややかでおいしそうである。

事実、こうした木の葉っぱはおいしらしく、さまざまな虫類、蝶蛾の幼虫から甲虫に至るまでがこの葉をかじる。虫というものはなかには雑食性のものもいるけれども、多くは食物が一定していて、どんな葉でもよいというわけではない。檜、欅を食べる虫けらが多いことはたしかである。しかし世の女性というものは軒並にこうした虫けらがお嫌いだ。むかしは「虫めづる姫君」などという方がいて、はだか虫なぞを飼っておられたけれど、最近の女性はずっと勇敢になったようでいて、はだか虫に対する敏感性はむしろ助長されているといつてよい。この事實はもっと考察されて然るべきだと思われる。

とにかく、せっかくの雑木林の若葉の香りも、このため女性と語らったり或いは語らなかったりする場所としてふさわしくないことがあるのは残念なことだ。

もう少しロマンティックな話をしよう。

ケシヨウヤナギという樹がある。もともと北方産の種で、ただ上高地にだけは例外的に群生している。上高地へ行ったことがない人も、たいてい梓川のむこうに、残雪をちりばめた穂高の岩

塊がつらなる写真を御存知だろう。この風景はあまりにありふれており、誰が撮ってもこうなってしまうので、ある種の映画スターの顔立ちにも似ている。といって、実際にこの光景に接すると誰もが胸をときめかせるので、ますます天下の二枚目というところだ。

たいいていの写真には、梓川の岸にこんもりとした樹々がうつつっている筈だ。落葉松でなければこの樹である。そして、それがケシヨウヤナギなのだ。普通のヤナギには全然似ていない。

上高地は神河地とも書き、多くの名所旧跡が行ってみるとろくでもない所にきまつているなかで、一度は見えておきたい場所といつてよい。ただし、夏の登山期をはずしての話だ。ちかごろでは紅葉の季節もあやしくなった。どんな風光の地でも、ゴミ箱をひっくりかえしたように人間をばらまいては仕方がない。夏の上高地に行くくらいなら、大きな冷蔵庫を買ってきてめぐりこんだほうがマシかも知れぬ。

私は上高地について語るいくぶんの資格がある。ほとんど人っ子ひとりいない盛夏の上高地を私は知っている。日本が戦争に負ける直前のことである。

そのときは、島々から上高地までバス道路をずっと歩いていった。もとよりバスもない時代で、徳本峠とくもとごえの道も荒れていて通れるかどうかかわからないと聞いたからなのだが、あの九里あるバス道路を全部歩いた人間は多くはないと思う。

そのほか、松本にいた関係で、私は初夏から晩秋までの

